

ブリーフィング資料：不登校経験から支援者へ ——「ユミリリ」氏の軌跡と支援のあり方

エグゼクティブ・サマリー

本資料は、幼稚園から20歳まで不登校・引きこもりを経験し、現在はVTuberとして活動しながら不登校支援に携わるユミリリ氏のインタビューをまとめたものである。ユミリリ氏の事例は、従来の「学校嫌い＝勉強嫌い」というステレオタイプを覆し、強い知的好奇心を持ちながらも、集団生活への違和感や自己肯定感の欠如から孤立を深める子供の心理を浮き彫りにしている。

支援における重要な転換点は、デジタル技術(VTuber活動やオンラインコミュニティ)を通じた「他者への信頼回復」にあり、現在の活動では「役割」に縛られない自然体な関わりと、感謝の言葉(「ありがとう」の魔法)を重視している。

1. 不登校・引きこもり時代の心理的背景と葛藤

ユミリリ氏は、幼少期から長期にわたり社会的な孤立を経験した。その背景には、単なる怠慢ではなく、深い心理的・身体的な要因が存在していた。

違和感と身体症状

- 「人と同じにできない」悩み：周囲との違いに違和感を抱き、「自分はダメなんだろうか」という思いが蓄積されていった。
- 表情の不一致：感情が顔に出にくいタイプであったため、家族を戸惑わせ、周囲から「怖い」と誤解されることに苦痛を感じていた。
- 体調不良の慢性化：周囲を気にしすぎるあまり、腹痛や頭痛などの身体症状を繰り返し、登校が困難になった。

家族への帰属願望と「眼鏡」への執着

- 家族全員が眼鏡をかけていたことから、自分だけが視力が良いことに疎外感を抱いた。「家族と同じ見た目になりたい」という一心で、暗い場所で本を読むなどして意図的に視力を低下させ、中学2年生で眼鏡を手に入れた際に安心感を得たという特異なエピソードがある。これは、幼少期の切実な「居場所」と「繋がり」への欲求を象徴している。

深刻な精神状態

- 一時期は「お前はいる子だ」という幻聴が聞こえるほど心が疲弊し、他者とのコミュニケーションが「黙るか、謝る(ごめんなさいと言う)か」の二択になるほど追い詰められていた。

2. 「勉強好きの不登校」という独自性

学校には通わなかったものの、ユミリリ氏は極めて高い学習意欲を維持していた。

知的好奇心と独学のプロセス

- 教科書への愛着: 教科書を「暇つぶし」として読み込み、特に倫理、社会(歴史)、理科に強い関心を示した。
- 独学の手段: 適応指導教室に在籍しながら、自宅では親のパソコンを借りてYouTubeの学習動画で自習を行っていた。
- 成果とギャップ: 授業に出席していないためテストでは赤点を取ることもあったが、好奇心に突き動かされた学習そのものは継続していた。

創作活動への熱意

- 読書感想文を毎年10枚以上執筆したり、イラストの参考書を模写したりするなど、アウトプットに対する高い熱量を持っていた。

3. 回復への転換点: コミュニティとVTuber活動

長年の孤立から脱する契機となったのは、オンライン上での繋がりと、自身の存在が肯定される経験であった。

V福祉プロジェクトへの参加(2024年)

- 世界の「色彩」の変化: それまで「モノクロで怖い人ばかり」に見えていた世界が、プロジェクトへの参加を通じて「色がついたように明るく」変化した。
- 心理的安全性の確保: 自分の意見を言っても怒られない、尊重されるという経験を通じ、「自分は生きていい存在なんだ」という自己肯定感を獲得した。

9年間にわたるVTuber活動

- YouTube活動を個人で9年間継続。かつてはアンチコメントに晒され「味方は自分しかない」と孤独な戦いを続けていたが、現在は多くの味方の存在を実感している。

4. 現在の支援活動と教育観

ユミリリ氏は現在、自身の経験を活かし、子供たちの「好きなこと」を見つける支援を行っている。

支援の具体的アプローチ

- 「好き」のきっかけ作り: 動画編集やLive2D制作を子供たちと一緒に学び、彼らの「やりたい」を形にする環境を準備している。
- 自然体での関わり: 支援者が「先生」や「親」といった「役割(仮面)」に縛られず、一人の人間として自然体で接することで、子供たちの安心感を引き出している。
- 「ありがとう」の魔法: 謝罪の言葉(ごめんなさい)を感謝の言葉(ありがとう)に置き換えることを提唱。感謝を伝えることで、子供たちが自分の存在価値を再確認できる好循環を重視している。

支援者・保護者への提言

- 言葉による承認:「あなたがいてよかった」というメッセージを、恥ずかしがらずに言葉にして伝えることの重要性。
- 多様な「当たり前」の許容: 不登校の経験から、普通や当たり前は人それぞれであることを学び、個々の在り方を尊重する姿勢。

主な引用・キーワード

項目	内容
自己肯定感	「自分って生きていい存在だったんだって思って、世界に色がついたように明るくなった」
コミュニケーション	「ごめんなさいより、ありがとうを言おう。ありがとうは魔法」
支援のスタンス	「甘やかすだけが愛じゃない。間違っていたら寄り添って『危ないよ』と言ってほしい」
子供へのメッセージ	「生きることを諦めないでくれて本当にありがとう」

結論

ユミリり氏の事例は、不登校支援において「学習機会の提供」と同等、あるいはそれ以上に「心理的安全性の確保」と「役割を超えた人間的交流」が重要であることを示唆している。デジタルツールを活用した自己表現やコミュニティへの参画は、孤立した子供が世界との繋がりを再構築するための有効な手段となり得る。